≪研　究≫

マチエ著『フランス大革命』に含まれる理論的混乱について

——(3)——

小　林　良　彰

Ⅰ　ジロンド派と山岳派の相違点が明確ではない
Ⅱ　山岳派は，ブルジョアの代表者か下層民の代表者か
Ⅲ　領主権の廃止と封建制度の崩壊とを区別するべきだ
Ⅳ　地主ではなく貴族がヴァンデー反乱の側に立った
Ⅴ　農民が反革命反乱に参加した理由を明らかにしていない
Ⅵ　平原派の代表者に誰の名をあげるべきか
Ⅶ　ジロンド派追放の評価が混乱している
Ⅷ　エベール派とダントン派の本質については正しく描いている
Ⅸ　ロベスピエール敗北の理由が正確に示されていない
Ⅹ　職人がロベスピエール派の側にも反対派の側にも出てくるが
Ⅸ　平原派と山岳派主流についての分析が不足している
Ⅻ　フランス革命史から，どのような結論を引き出すべきか
XIII　明治維新史への悪影響について

Ⅰ　ジロンド派と山岳派の相違点が明確ではない

ジロンド派と山岳派の相違について，マチエはさらに深くつっこんだ解説をしようとしている。この問題は，もともとフランスの歴史学会にある基本的な論争点を踏まえたものであった。

それは，ジロンド派と山岳派の闘争が，階級闘争であったかなかったか

をめぐる論争である。まず，ジロンド派と山岳派の間には，ほとんど原則的な相違がなかったという考え方があり，したがって，そこには階級闘争もないという意見があった。こうした見解に対して，マチエは，両者の間に階級闘争があったと主張した。この点にマチエの新しさがあった。これはこれで，当時としては進歩的な見解であった。そうした考え方を示している文章が，以下のものである。

「だが，これまで軽々しく断言されたように，「ジロンド派と山岳派の間には，まったく原則上の不和が存在しないこと，また双方の間の差別は，人物間の競争と，またパリが国家の政治の指導において果すべき役割についての考え方だけだ」ということになるであろうか。これ以上に不正確な考えはない。ジロンド派と山岳派の争いは深刻なものであった。それはほとんど階級闘争である。ジロンド派は，ドーヌーがいったように，「多数の啓蒙された地主と市民」をふくんでいた。彼らは社会的階級制度の感覚をもっていて，これを保存し，強めようとした。粗野で，教養のない民衆にたいして，彼らは本能的な嫌悪をいだいていた。そして所有権をさわることのできない絶対のものとみなした。彼らは民衆を無能力者と思い，統治権の独占を自分の階級だけにとっておいた。財産のあるブルジョワ階級の行動を妨害する性質のあることがらはすべて，彼らにとっては悪とみなされた。ロランと一緒に彼らは，もっとも完全な経済的自由主義を主張した。彼らにとって，もっとも完全な国家とは，個人に対してもっとも抵抗の少い国家であった」。

「これに反して山岳派は，下層民，すなわち戦争の危機に苦しんでいる人々，王位をたおした人々，蜂起によって政治的権利をもつ者にまで自分をたかめた人々などを代表している。ジロンド派にくらべて理論に熱中してはいないが，ジロンド派よりも，実社会にずっとちかいだけに，一層現実主義者である彼らは，フランスが通過している恐しい状態が非常時的救済を必要とすることを理解していた。それで，彼らはわけもなく生活権を財産権に対立させ，公衆の利益を個人の利益に対立させた。原則を尊重するという口実で，一階級と祖国をはかりにかけることができるなどとは，彼らの理解できることではなかった。必要な時がきて，大衆の最高の利益が要求するならば，個人の自由と財産との制限に訴えることを用意していた」[1]。

ジロンド派と山岳派の対立がほとんど階級闘争であるという考え方は，

1 マチエ『フランス大革命』ねずまさし，市原豊太共訳，岩波文庫3冊，昭和32，34年，中巻，93-95ページ。

階級闘争がまったくなかったという考え方よりは，より真実に接近している。ただし，両者の階級的基盤の説明がやや乱雑であり，思いつきのままに，あれこれの言葉を並べ立てたところに，欠陥があった。

たとえば，ジロンド派が「多数の啓蒙された地主と市民を含んでいた」という言葉を引用して，これを正しいものとしている。ここで，「地主」という言葉を不用意に使うことが，混乱をまねく。なぜなら，すでに以前説明してきたように，貴族すなわち領主のことを，たびたび地主と表現してきたからである。

そのため，ここで地主と呼ぶのは，領主のことか，領主ではないのか，まずそのあたりが問題になってくるが，マチエは，なんらの規定なしに「地主」と書く。そうすると，読者はそのまま，領主としての貴族のことではないかと受け取る。これが混乱の始まりだ。

この時期，すでにもう領主としての貴族はいない。なぜなら，封建貢租が無償で廃止されたからだ。それにもかかわらず，地主がいて，ジロンド派の背景をなしているのはどういうことかと質問されるだろうし，それに対する説明がなければならない。この点についての説明は，マチエの本ではまったく見あたらない。

ただし，ここで「地主」(propriétaires の訳だが，[2] 正確には土地所有者)という言葉を使うのがまったく間違っているのではなくて，「地主」の言葉を正確に定義しさえすれば，正しい表現になる。この場合は，私が先に説明をしたように，[3] 領主権に服していた地主で，厳密にいうと土地保有者であったが，領主権の廃止のため，この時はじめて完全な土地所有者になった地主と解釈するべきである。あるいはもし，貴族やブルジョアが領地をもっていたとしても，その領地の直領地が残ったと考えるならば，これは

2　A. Mathiez, *La Révolution française*, Paris, 1963, t. 2, p. 67.
3　本論文(1)のⅥ，(2)のⅣを参照。

地主として通用する。こうした意味の地主と規定するならば，筋が通る。

ジロンド派を商業ブルジョアと前にいいながら，今度は啓蒙された市民といい，つぎに「財産のあるブルジョワ階級」というが，フィヤン派が大ブルジョア階級といったことの矛盾については，マチエの本からはなんらの説明をも受け取ることができない。

これはどう考えるべきかというと，両派ともに大ブルジョア階級の代表者であるが，実は，大ブルジョア階級が二つに分裂していて，領主権にかかわり合いのある程度が多いか少いか，また旧体制に対する寄生性が多いか少いかによって，二派に分れたと解釈するのが正しい。[4] マチエの本では，そのような説明はなんらなされていないので，一度倒された者が，またつぎの時代に権力についたかのような印象を受ける。

また，山岳派の説明があいまいである。以前の説明では，山岳派は人民階級を表現しているが，今度は「下層民」といい，この下層民を表現するものとして「戦争の危機に苦しんでいる人々，王位を倒した人々，蜂起によって政治的権利をもつ者にまで自分をたかめた人々」を代表しているという。この説明はいちじるしく政治的説明になっている。

戦争の危機に苦しんでいる人々の意味は，戦争自体に苦しんでいるのか，戦争がもたらした危機の中で，生活が苦しくなったという意味なのか分らない。もし前者であるならば，ブルジョアも含めて危機感をもっていたわけだし，後者と考えるならば，下層民であることは間違いがないが，どうも，もう一つはっきりしない。

王位を倒した人々という表現では，ますますあいまいになる。なぜなら，多数のブルジョアが，この時点で武装蜂起に参加したからである。ジロンド派のバルバルーは，マルセイユ連盟兵を率いて武装蜂起に参加したが，彼は，マルセイユのブルジョアジーの代表者であった。[5] 王位を倒した

4 本論文(2)のX参照。

ものは，下層民だけではなかった。いずれにしても，このマチエの説明はきわめて政治的にかたよった説明であって，もし階級的闘争を主張したいのであれば，もっと経済的な背景を説明しなければならない。

II　山岳派は，ブルジョアの代表者か下層民の代表者か

もっと重大なくいちがいは，山岳派が下層民を代表するといいながら，そのすぐ後に，山岳派がジロンド派同様にブルジョアの出身であったと書いていることだ。それは，つぎの文章に見ることができる。

「戦争問題からおこって，退位問題で悪化したジロンド派と山岳派の対立は，8月10日事件以来，もはや純然たる政治的対立でなかった。階級闘争が姿をあらわしたのである。しかし山岳派の一人のボードは，多数の山岳派のためには，「大衆との接触と協力の政策がとくに戦争の必要から強制された戦術であった」ということを十分に看取した。大部分の山岳派は事実，ジロンド派同様にブルジョワの出身であった。彼らが始めた階級政策は完全に人民のなかからは出てこなかった。カール・マルクスがいったように，「これは，王や僧侶や貴族などと，また大革命のすべての敵と縁をきるその場かぎりの政策であり，平民的なやり方であった」。このことが，彼らの政策を根本的にジロンド派の政策と対立させたのであった」。[6]

このマチエの短い文章の中に，致命的な矛盾がみられる。彼は，ジロンド派対山岳派の対立について，「階級闘争が姿をあらわした」と書く。その後に，「しかし」を入れて，山岳派がジロンド派同様ブルジョアの出身であったと書く。

たしかに，この二つは相反している。だから，その間のつなぎが，「しかし」という接続詞になる。「しかし」の言葉で，正反対の意味になる文章をつないでいるわけだ。そして，山岳派の階級政策が完全に人民の中からは出てこなかったといっている。このこと自身は正しい。だが，正しい

5　小林良彰『フランス革命の経済構造』千倉書房，昭和47年，294，341ページ。
6　マチエ前掲書，中，96ページ。

としても，それでは，同じブルジョア出身のジロンド派と山岳派が，なぜ階級闘争を演じるようになったのか，その原因についての説明が必要になる。しかし，その説明はない。

その後で，マルクスの言葉が引用される。もちろん，その引用も原文通りではなく，マチエなりの解釈で修正した文章になっている。[7] こうした文章の配置では，読者は，いったい山岳派がブルジョアの代表者なのか，人民階級，下層民の代表者なのか，あるいはなぜ，ブルジョアが下層民，人民階級の代表者になったのか，その因果関係が理解できないはずである。この問題については，もっと後になって，くわしく論じることになる。

Ⅲ 領主権の廃止と封建制度の崩壊とを区別するべきだ

話はもとに戻って，8月10日以後に封建貢租が無償で廃止された。この事実を，マチエはつぎのように書いている。

「すでに8月14日彼らの一人フランソワ・ド・ヌフシャトーは，入会地の財産を全市民にわけること，また亡命貴族の土地財産を小農地—この小農地は，貧民がたやすく入手できるように，15年の年賦で償還されるわけである—に分割することを議会に決定させた。8月16日，以前の封建的租税のための訴追はすべて禁止され，ついに25日には，議会は無償で一切の封建的租税—今後その持主は原文書を提出することができなくなる—を廃止した。封建制度の崩壊は，王位の崩壊をともなった。こうなれば，農民はもう王のことを，したわなくなるだろう」。[8]

この事実そのものは正しい。ただし，封建的租税といういい方について

7 マルクスの正確な文章は，翻訳者の注として紹介されている。マルクスは，「ブルジョアジーの敵である絶対主義や封建主義や素町人どもをかたづけるための平民的なやり方」といっているので，山岳派の行動も，ブルジョアジのー利益を貫徹するための闘いになったとみている。マチエは，この引用文を楯にとって，その前では，山岳派の政策が人民の中から出てこなかったといい，その後では，山岳派の政策が平民的なやり方であり，そこが，ジロンド派との根本的な差だという。同じ引用文を利用しながら，相反する理論化を行っている。

8 マチエ前掲書，中，64-65ページ。

は，誤解を招くので，これは封建貢租というべきである。租税というとならば，国家あるいは地方公共団体に納入するものと読者に思わせるからだ。そうではなくて，これは，その土地の領主にたいして納める貢租であった。（原文は droits féodaux で，封建的権利のことを指す)。

ところで，この事件を解釈して，「封建制度の崩壊は，王位の崩壊をともなった」という。ここに，誤解の種がまかれる。領主権の廃止を，封建制度の廃止と同一視してはならない。マチエのように，この二つを同じものとして扱うならば，フランスの封建制度は，バスチーユ占領の時ではなくて，8月10日の事件で消滅したことになる。ちょうどここで，王位も崩壊したために，なにか理論的には，きわめて整然としたもののように見える。

しかし，それでは，7月14日はいったい何であったかという質問が，逆に返されてくる。それを更に延長するならば，イギリス革命の解釈にまで及ぶ。イギリス革命では，領主権が廃止されていないのであるから，8月10日の事件に相当するようなものが現代にいたるまでおこっていない。そこで，8月10日をもって封建制度の崩壊というのであるならば，イギリスの封建制度は，今もって崩壊していないといわなければならない。こうした理論的な矛盾が出てくる。

そうではなくて，封建制度の崩壊と領主権の崩壊は別のものであって，バスチーユ占領の時点でもってフランスの封建制度は崩壊したが，領主権がまだ部分的に残り，これが8月10日の時点で崩壊したというべきである。

また，王位の崩壊も，封建制度の崩壊を意味しない。なぜならば，バスチーユ占領以後は一種の立憲君主制の国になった。そして，イギリス革命以後のイギリスもまた，立憲君主制の国になり，それはそれで封建制度の崩壊を意味したからである。封建制度の崩壊には，王位の崩壊が絶対的に

必要だというわけではない。

Ⅳ 地主ではなく貴族がヴァンデー反乱の側に立った

ヴァンデーの反乱について，「反乱の経済的社会的原因」という見出しがある。[9] ここを読むと，急激な物価騰貴，下層民の深刻な生活難，これにともなう不穏な情勢が紹介されている。これはこれで正しい。

しかし，これだけならば，この潜在的条件は，過激派の運動につながり，さらには，山岳派をつきあげて恐怖政治を押しすすめる原因になる。それがヴァンデーの反革命反乱に直接結びつくといわれても，これだけでは納得しがたい。

マチエはこのような解説をしておいて，そのあと，徴兵制度の布告が反革命反乱の口火を切ったと説明する。また，徴兵制実施のときに，金持階級に特権が与えられたことが，深刻な不満をまきおこしたと指摘する。[10] しかし，このような事情は，ヴァンデー地方だけでなく，全国的に存在したのだから，もしこの説明でいくならば，なぜヴァンデー地方だけに，反革命の暴動がおこったのか，そこのところの説明にならない。

もう一つ，マチエの説明のごたごたしているところがある。はじめに深刻な生活難とその影響について書き，そのあと突然ジロンド派と山岳派の闘いにふれる。「山岳派が地主の財産をねらっている」とジロンド派がまず警告し，そのあと警告の対象になった地主が，「無政府状態と農業法を恐れて」右翼に戻り，王制をなつかしむ気持に傾いたと書く。

「ジロンド派と山岳派の激しいたたかいは，不安とうたがいと，失望をひろめた。数カ月間「山岳派が地主の財産をねらっている」ということをジロンド派が地

9 マチエ前掲書，中，256ページ。
10 マチエ前掲書，中，260ページ。

主たちに繰返して云っていた時，地主たちはジロンド派の言葉を大喜びで信じたのである。無政府状態と農業法をおそれた彼らはふたたび右翼にもどった。彼らは王制を惜しむ気持に傾いた。「王制は，今ではもっとも確実な治安の保障である」と彼らに思われはじめた[11]」。(地主とは propriétaires の訳)。

この短い一文で，地主が反革命に動いて，王党派になったと思わせるのであるから，ヴァンデー反乱の階級的基礎に，地主がいたと読者は思うであろう。この場合も，この「地主」が旧領主であるのか，それとも，昔は領主権に服していた地主で，これが封建貢租の無償廃止で完全な地主に昇格したもののことをいうのか，どちらかわからない。

ここでいう農業法とは，土地の共産主義的所有，または均分に近い状態を要求していた過激派の主張を指している。当然，それは，領主であろうと地主であろうと，すべての大土地所有者をおびやかすものになった。しかし，だからといって，彼らがそのまますぐに反革命，王党派に走らなければならない理由はない。なぜかといえば，国民公会の議員は，当時，山岳派も含めて，このような極端な方針を口にしたわけではなかったから。

この点について，もう少し正確な定義をするならば，ヴァンデーの反革命暴動に参加した大土地所有者とは，旧領主としての貴族であった。そのような貴族達は，伝統的な威信や軍事的な才能をみこまれて，この反乱の指揮官に祭りあげられた。その中には，宮廷貴族もおれば，地方貴族もいた。これを指摘することは正しい。またそれなりの因果関係がある。

封建貢租が無償で廃止されたばかりであるから，もし反革命運動に成功するならば，封建的権利を昔の状態に帰することができる。当然，貴族(領主)は反革命家になるわけである。そのような貴族の実例を，私はかつてまとめておいた[12]。

マチエもこの実例を書いているが，平民の指導者のあとに，雑然とした

11 マチエ前掲書，中，259ページ。 A. Mathiez, *op. cit.*, t. 2, p. 192.
12 拙著『フランス革命の経済構造』308-311ページ。

形で，名前をあげている。そのうえ翻訳のミスもある。ボンシャン侯と書きながら，レスキュールとラ・ロシュジャックランには爵位をつけない。あとの二人も同じ侯爵である。マチエがボンシャンにつけた形容詞は(chevaleresque)「騎士道的な」[13]という意味であったが，それを翻訳者が侯爵に置きかえ，他の貴族は爵位なしで紹介されている[14]。これでは，爵位なしで紹介されたものは貴族か平民か分らなくなる。

さて，反革命に参加したものは貴族であったが，これを地主と表現するならば，意味はまったくちがってくる。なぜなら，領主権に服していた農民身分の地主とか，ブルジョア地主は，なにもまだ，この時点で，反革命すなわち王党派の側に立つべき理由を持たないからだ。

彼らは，ともかく封建貢租の無償廃止で，完全な地主として自立できた。もし王制が復活するならば，また自分達の上に，貴族＝領主が帰り咲き，またもや封建貢租を支払わなければならなくなる。そのような因果関係があるのに，なぜ，命をかけてまでも，反革命の陣営に参加しなければならないかというのである。

しかも，まだ国民公会ではジロンド派が影響力を保っている。ジロンド派は前にも引用されていたように，ともかくも地主の利益を守っていた。ヴァンデー反乱が起された時には，ジロンド派は多少後退したとはいえ，まだ行政権の一端をにぎっていた。しかも国民公会での影響力はまだ強かった。そのジロンド派が，市民と地主の代表者であるとマチエは書きながら，今度は，ヴァンデー反乱の説明のときに，地主が反革命の側に立ったと書く。

そうすると，地主はジロンド派の側にもつきながら，ヴァンデー反乱の側にもついたという理論上の矛盾をきたす。これは，マチエが，領主と地

13 A. Mathiez, *op. cit.* t. 2, p. 196.
14 マチエ前掲書，中，263ページ。

主の区別を正確につけていないところから起ったものである。

V　農民が反革命反乱に参加した理由を明らかにしていない

マチエは農民問題に弱いといわれているが，このことをはっきりと示すものがある。マチエは，ヴァンデー反乱の原因についての説明の中で，ヴァンデー反革命反乱の最大の人的資源が貧しい農民であったという事実をほとんど指摘しておらず，またその因果関係についてもまったくふれていない。

このように，農民についてのなんらの説明がなくて，突然，事件の説明になると，農民がいっせいに蜂起したと書く。これでは，事件の描写そのものは正しいとしても，なんのための経済的社会的原因の説明か，わけがわからなくなってしまう。この点についても，私は詳しく分析したことがある。[15]

ここで反乱を起した農民の中心は，とくに貧しい小作農であった。この小作農達は，教会財産の売却，亡命貴族財産の売却によっても自作農になることができなかった。かえって，地主としての主人が変っただけの者が多かった。とくに教会所有地（教会領の直領地と，領主権に服していた所有地の二種類がある）のもとで小作農として働いていた農民に，そのことがいえる。教会財産の没収と売却の政策でこの土地を手に入れた新しい地主は，ときに町のブルジョアであり，ときには農村の地主（農民身分の）であった。これらの新しい地主の支配下に入ったとき，以前の僧侶の管理にくらべて，より厳しい主人に出くわしたのである。

15　拙著『フランス革命の経済構造』314-320ページ。『フランス革命史入門』三一書房，昭和53年，229-230ページ。

そうすると，このような小作農は，革命からなんらの利益も得ることができない。かえって，革命の結果，小作料の取り立てが厳しくなる。ここで，急速に革命への情熱は薄れ，旧制度をなつかしむようになった。このような経済的因果関係があったため，貧しい農民が反革命暴動へ参加する経済的社会的原因が生じた。教会の土地が農村在住者の手にわたることが少なく，遠くはなれた都市や町のブルジョアに買占められたところで，地元の革命派が少くなり，農村の反革命的気分が高まった。

国有財産，すなわち教会財産，亡命貴族財産を買い入れた新地主は，革命政権に忠実な側になり，共和派の社会的基盤になる。これが反革命軍の攻撃の対象になった。

彼らは貴族，僧侶からも憎まれ，また貧しい小作農からも憎まれた。ここに，裕福な地主をはさんで，貴族と貧しい農民の一見すれば奇妙に見える同盟が作り出された理由がある。

これが正しい因果関係の説明であり，それだけにマチエのいうように，地主が反革命の側についたという表現は，ますます不適当なものになる。マチエのように，地主と貴族の区別なしに物ごとを解説するのでは，混乱を招くだけのものになる。彼のような粗雑な言い方で，地主も反革命の方向へ進み，農民も大挙して反乱の側についたというと，地主と農民が手をとって反革命を起したことになり，農村には，革命派が見当らなくなってしまう。これは，ナンセンスな説明になる。

VI 平原派の代表者に誰の名をあげるべきか

マチエは，国民公会の政争を解説するときに，ジロンド派対山岳派の対立を理論上では論評するが，事実を述べるときには，その両派の間にあった平原派のことを正しく描いている。これを，彼は中央派とも呼んでい

る。この描き方はまったく正しい。

「それであるから政権をにぎっているのは，中立を鼻にかけ，両派の激情の仲間にはいらぬ中央派であった。バレールとカンボンがその首領である。彼らは，革命の幸福の達成のために採用すべき厳重な手段に関係のあるたびごとに，かならず山岳派とともに投票した。しかし，パリの自治市会と，またしばしばその鼓舞者であったダントンについては，消しがたい疑念をいだいていた。個人の問題に関係があり，パリの政治が問題になった投票には，ほとんどすべて彼らはジロンド派とともに投票した。そしてもはや政権についていないジロンド派が，依然として議会で多数をしめていたのである[16]」。

これは，今までのフランス革命の書物には見られない長所であって，この説明こそが，恐怖政治の正確な描き方につながる。

ただし，ここにもやや，不足な点がある。それは，この中央派の首領に，バレールとカンボンの名をあげたところにある。これは，平原派の本質，ひいては国民公会の誤解につながる。バレールとカンボンは，たしかに中央派の有力議員であった。しかし，彼らはその後，山岳派の側に強く接近して，中央派の中の山岳派寄りになる。そして，長期的な動向をみるならば，恐怖政治が全廃される過程で，彼らもまた，ロベスピエールの共犯者という非難をあびせられ，粛清されてしまう。しかも，バレール，カンボンを粛清した者は，ほかならぬ中央派の多数であった[17]。

この二人を中央派の主領といい切ってしまうところに，また間違いが出てきた。この二人については，この時点において，表面的にはもっとも華々しく活躍し，山岳派との同盟にもっとも熱心であった中央派の議員というべきである。しかし，後には，中央派の大多数がこの二人をも切り捨て，自分達独自の立場に戻ってしまう。

---

16 マチエ前掲書，中，274ページ。

17 拙著『フランス革命経済史研究』ミネルヴァ書房，昭和42年，106，119-120ページ，『フランス革命の経済構造』456-485ページ，『フランス革命史入門』241-242，302-309ページ。

もし，そのような本来の中央派有力議員の名を問題にするならば，カンバセレス，ボワシ・ダングラ，シエイース等の名をあげるべきであった。[18]

Ⅶ ジロンド派追放の評価が混乱している

ジロンド派が追放された事件を説明するときに，マチエは，以前の混乱した説明の延長として，ジロンド派とともに，大ブルジョア階級が倒されたと規定している。

「したがって6月2日は政治革命以上のものであった。サンキュロットがひっくり返したものは，ただに一党派だけでなく，ある点までは一つの社会階級であった。王位とともに倒れた少数の貴族の後で，今度は大ブルジョワ階級が倒されたのである」。[19]

ここで問題になるのは，少数の貴族が倒されたあとで，こんどは大ブルジョア階級が倒されたと書いていることだ。そうすると，マチエの頭の中では，8月10日の事件で貴族が倒され，つぎにジロンド派とともに大ブルジョア階級が倒されことになる。ところが，8月10日の説明では，大ブルジョア階級と自由主義貴族が粉砕されたといっている。[20] いったいどちらが正しいのであるかと聞かなければならない。

大ブルジョア階級が，フイヤン派とともに倒されて，またジロンド派とともに倒される。一度倒された者が，またジロンド派とともに権力をにぎり，それがまたジロンド派とともに倒されるというのでは，せっかく階級闘争として捉えようとした観点を，自ら踏みにじってしまうことになる。

そのうえ，もし今度の説明が正しいとするならば，8月10日で貴族が倒

18 拙著『フランス革命経済史研究』102-103ページ，『フランス革命の経済構造』460ページ，『フランス革命史入門』242，302-303ページ。
19 マチエ前掲書，中，294ページ。
20 マチエ前掲書，上，303ページ。本論文(2)のⅫ参照。

され，6月2日で，すなわちジロンド派追放で，大ブルジョア階級が倒されたのであるとするならば，バスチーユ占領はいったい何であったかが問題になる。つまりバスチーユ占領から8月10日までの三年間は，依然として貴族が支配していたと解釈されるだろう。これでは，バスチーユ占領はブルジョア革命ではなくなり，貴族の権力を作った革命といわれることになるが，その方向にむけての首尾一貫した説明もしていない。もちろん，それはとうてい不可能なことだが。

やはり，事実からすれば，フイヤン派の背後に大ブルジョア階級がいたといわなければならない。この前提条件はくつがえすことができない。いずれにしても，これらマチエの文章をつなぐだけで，救いようのない理論的混乱の続いていることがわかる。

マチエも，自分の言い方になにかあいまいなものを感じている。そこで，ある点までは一つの社会階級であったといういい方で，この追求を逃げようとしている。ある点までは と断わっているが，どの点までが社会階級で，どの点までが社会階級でなかったのか，これを言外の意味にしないで，はっきりと規定しておかなければならない。もし彼が前に引用したように，階級闘争だと主張したいのであれば[21]，ある点まではとあいまいなことをいっていたのでは，自分の説を強く押しだすことすらできなくなる。

さらに，「サンキュロットがひっくり返した」といういい方もまた極端である。ジロンド派追放をおこなった勢力がサンキュロットだけだと断定すると，6月2日はサンキュロット革命になる。そうすると，ブルジョア対サンキュロットの図式の中で，サンキュロットがひっくり返したのであるから，これは非常に急進的な，いわばプロレタリア革命の前史であるかのように思われる。

そして，このような解釈を，戦前から戦後にかけて，日本の歴史家がた

21 マチエ前掲書，中，96ページ。

びたび引用して，恐怖政治をサンキュロット独裁の図式に置きかえ，これを世界中の基本法則にまで高めていった。これをさらに，イギリス革命や明治維新にまで引きのばして，両者にはこのようなサンキュロット独裁のような時代はなかったから，フランス革命にくらべて不徹底であるとか，妥協的であると考え，ブルジョア革命というには不完全であると規定する図式を作り上げた。

したがって，「サンキュロットが大ブルジョワ階級をひっくり返した」という短い言葉のもつ意味は，きわめて大きな影響力をもっている。

この点について，先に結論だけをいうならば，ジロンド派を追放したのは，なにもサンキュロットの力だけではなかった。山岳派の背後には，中流のブルジョアジーがあった。また，平原派は，ジロンド派の追放にもかかわらず，残って権力の一部を分担した。そして，平原派の背後にもまた，ブルジョアジーの上層の一部がいたので，まだ大ブルジョア階級の全部がひっくり返されたわけでもなかった。この事件で，サンキュロットが簡単に権力をにぎったわけでもない。サンキュロットの力は，あくまで大衆運動の圧力の一環として使われたのであり，彼らの代表者が，そのまま権力の座に上昇したわけではなかった。

Ⅷ エベール派とダントン派の本質については正しく描いている

エベール派とダントン派の処刑についてのマチエの説明は，他の著者とは違った長所をもっている。もともと，マチエは，エベール派やダントン派の背後にいた一連のブルジョア，とくに外国人銀行家が企てていた陰謀について，個別的な研究を発表してきたので，ここは彼の得意の分野である。

そこで，エベール派やダントン派の中にいたこれら一群のブルジョアの行動を，詳しく紹介している。彼は，この二つの党派を汚れた党派として描いているが，これは正しい。フランス革命史に対するマチエの最大の功績は，この点にあるだろう。というのは，それ以前でも，それ以後でも，エベール派をもって人民の前衛と解釈したり，ダントンを革命の英雄として礼賛しようとする傾向が強いからだ。ところがマチエは，エベール派の陰謀に，外国人銀行家の陰謀が絡み合っていたことを指摘して，エベール派の運動が単純に人民運動の前衛とは呼べないことを証明している。[22]

また，ダントン派議員が，とくに汚職議員の集りであることを強調し，「自分個人の財産のためにだけ働いた山師共」と，厳しい評価を下している。[23] この評価も事実に一致しているが，マチエ以前のフランス革命史家は，ダントンの汚れた部分には目をつぶり，革命フランスの救国の英雄として描くことに熱心であった。この見解の相違が，マチエとオーラールの，革命史上有名な論争をまきおこした。

IX　ロベスピエール敗北の理由が正確に示されていない

つぎに，テルミドールの反革命の説明に入るが，ここのところはごたごたしている。事実関係についての叙述には間違いがない。ただ，理論的に整理されていないので，事実の羅列のような形になっている。

テルミドールの反革命へ進む道は，ロベスピエール派の孤立であるが，ロベスピエール派がなぜ孤立していったかの説明が，もう一つすっきりとした形でなされていない。

もちろん，その出発点が，「反革命容疑者の財産を貧しい愛国者に与え

22　マチエ前掲書，下，152ページ。
23　マチエ前掲書，下，246ページ。

る」と規定したヴァントーズ法（風月）にあることは示されている。[24] また，保安委員会の権力を横取りするような「一般警察局」を公安委員会内部に設置して，これをロベスピエール派がにぎるために提出されたプレリアル法（芽月）にもふれ，これが保安委員会とロベスピエール派の対立の原因になったことも詳しく紹介している。[25]

ところが，このようにロベスピエール派と保安委員会の対立の因果関係を説明しながら，公安委員会内部の分裂については，社会経済的な因果関係を抜きにして，気質の違いの側面から説明している。

公安委員達が性格の強い人々であって，ロベスピエールが，その中から一人抜きんでくることに快く思わなかったとの説明である。

「もし公安委員会が依然として団結をつづけていたならば，治安委員会の不機嫌を無視できたかもしれないが，公安委員会を構成する11人は，あまりにも性格の強い人々であり，まためいめい過去の功績にたいする自信が強すぎたので，仲間の一人が頭角をあらわして，他の人々の影がうすくなるように見えることを，我慢して許すことができなかった」。[26]

この治安委員会とは保安委員会のことである。この文章であれば，保安委員会とロベスピエール派の対立はともかくとしても，公安委員会内部でロベスピエール派が孤立した原因については，心理的要因だけに限定されてしまう。性格の問題，つまりロベスピエールの人気がとくに高まったから，それを他の委員が面白く思わなかったというような，心理的な問題にすりかえられている。しかし，そのような心理的対立感情は，いずれの時代，いずれのグループにもあり，それを含みながら，それなりに安定しているものだ。

実際は，そのような心理的要因ではなくて，やはり社会綱領をめぐるも

24 マチエ前掲書，下，222-226，300ページ。
25 マチエ前掲書，下，291-292，300ページ。
26 マチエ前掲書，下，292ページ。

のがあった。公安委員会の多数は，ロベスピエール派の社会政策（ヴァントーズ法）が実施されることに反対であった。そこで，実施のための活動を，できるだけ引きのばそうとした。

この点は，マチエもまた事実としては別なところで紹介している。公安委員の一人ビヨー・ヴァレンヌが，「自分たちは人民委員会の構成をできるだけおくらせたことを誇りとする」[27]といったことを引用している。これが，公安委員会の多数と，ロベスピエール派の内部抗争の原因であった。

人民委員会とは，ヴァントーズ法を実施するための行政機関と考えられていた。公安委員会の多数派は，この組織をできるだけ引きのばそうとし，ロベスピエール派は，できるだけ早く推進しようとした。その対立は，とりもなおさず革命綱領をめぐる対立であった。

もし，ロベスピエール，サン・ジュストの望んだ政策が実現されたならば，フランス革命で権力の座についたブルジョアジーと農村の地主の財産が没収されて，それが貧民の手に無償で渡される。これこそ，土地革命と呼ぶべきものとなる。また，都市では，小市民の共和国ともいうべき一つの理想社会が実現されただろう。

しかし，これを公安委員会の多数は阻止しようとした。それは，公安委員会の多数が，やはりブルジョアジーの階層に属していたことの反映であった。[28] マチエは，そのような事実を紹介することはするが，理論的な説明と事実の説明の場所が，かなりかけ離れているので，読者がよほど注意しなければ，それが結びつかない。

別の場所では，マチエは，ロベスピエールやサン・ジュストの社会政策の意義をはっきりと紹介している。それはつぎのような文章である。

---

27 マチエ前掲書，下，301ページ。

28 拙著『フランス革命経済史研究』117ページ，『フランス革命の経済構造』438-447ページ，『フランス革命史入門』289-299ページ参照。

「ロベスピエールは，バレールの意図を取違えなかった。彼もまた反革命派の財産がついに貧乏人に分配され，そしてサン・ジュストがその計画を用意した市民制度が設立されて，確保されるまでは，恐怖政治をつづけねばならない，と考えていた」。（マチエ 前掲書，下，315ページ）。

ところが，この文章の前後には，これとは理論的にあまりかかわり合いのない事実が，いろいろと書かれていて，読者の頭を混乱させる。

X 職人がロベスピエール派の側にも反対派の側にも出てくるが

テルミドールの反革命で，ロベスピエール派が処刑されたことを書くとき，マチエは，職人や労働者がロベスピエール派の反対にまわり，国民公会の側に立ち，「最高賃金の畜生！」と叫んだことを書いている。

ロベスピエール派が賃金の釘づけをはかり，賃上げ運動に対しては厳しい態度でのぞんだことへの反感の現れであった。この事実は正しい。ロベスピエール派は，貧しい人々を救済するべき社会政策を立てながら，貧しい労働者や職人から反感をもたれたのである。それを，マチエは悲しい皮肉といっている。

それでは，ロベスピエール派の熱心な支持者は，いったいどのような階層から来たのかという疑問がでてくる。これについて，マチエは，小ブルジョア階級や職人の進歩的な部分と表現している。

「何という悲しい皮肉であろうか！ロベスピエールとその一派は大部分，財産の新しいてんぷくのために恐怖政治を役立てようと望んで，死んだのだ。彼らがヴァントーズの法律によって建設しようと夢みた金持も貧乏人もない平等主義の共和国は，彼らと共に死刑に処された。自覚のないサンキュロットはまもなく「最高賃金の畜生！」と叫んだことをくやむことになる。彼らはやがて公定賃金を復活するために蜂起するが成功しなかった」。

「さしあたって，沼沢派と合流した貪慾なテロリストの勝利の重大さを理解した

のは，ロベスピエールによって闘争に召集され，クラブや革命的行政当局をみたしていた小ブルジョワ階級や職人たちの進歩的部分だけであった[29]。

この表現も一応は正しい。しかし同じ頁で，職人達が物価騰貴に不平をこぼしていたこと，軍需工場の労働者が動揺していたことを書いている。職人や労働者が，最高賃金制と物価騰貴のために，ロベスピエール派の反対側にまわったという。しかし，他方で，ロベスピエールの側に立って闘争したのは，小ブルジョアと職人達の進歩的部分という。これでは，職人といわれる階層について疑問がでてくるだろう。

マチエのいい方によれば，おそらく，職人の進歩的部分だけがロベスピエール派にまわって，自覚のない者は，反対側にまわり，のちにそれを悔むのだとの説明になる。果して，ただ賢明であったかどうかのちがいが，ロベスピエール派に参加するかしないかのちがいになったといえるだろうか。

そうではなくて，ロベスピエール派を熱心に支持した階層とは，小ブルジョア階級の名にふさわしい，職人の親方層であった。ロベスピエールと，指物師の親方デュプレーの関係は有名であり，これが一つの象徴となっている。ロベスピエール派として処刑された者のリストを見ると，職人の親方，芸術家，中小工場主など，まさに小ブルジョアの名にふさわしい者が多い[30]。

それは，下層の職人や労働者ではなくて，使う数は少数だとしても，ともかく彼らを使う立場に立つ者であった。まだ大工場の少い当時にあっては，そのような小工場主や職人の親方の数も非常に多く，しかも彼らはやはり一種のブルジョアとして，自分が使っている労働者や職人に対しては，主人としてふるまっていた。

---

29 マチエ前掲書，下，327ページ。
30 拙著『フランス革命の経済構造』450-453ページ。

そこには，明らかな階級の違いがあった。それだけに，彼らは，最高賃金制の維持には熱心になった。しかし，財産の大きなブルジョアとはちがっていたから，ロベスピエールの社会政策を理解することのできる立場にあった。同じく職人とはいっても，ロベスピエール派の職人とは親方層であり，最高賃金制に不満をもっていたのは下層の職人，使われる立場にあった職人と解釈できる。[31] このあたりにも，マチエの書き方に，もう一段とつっこんだ解説が欲しいところであった。

IX 平原派と山岳派主流についての分析が不足している

最後に，それでは恐怖政治を推進しながら，ロベスピエール派と対立して，ついにはロベスピエールを殺してしまった公安委員会の多数とは何かについて，すっきりとした解釈が立てられなければならない。

また，マチエのように，ジロンド派が商業ブルジョアだと定義するならば，それ以外のブルジョアはどうしたのか，平原派の側にいたのか，それとも山岳派主流の側にいたのか，そこのところを首尾一貫した説明で結ばなければ，理論的解釈が成り立たない。ところが，マチエは，その点については尻切れとんぼであり，ロベスピエール派を倒した者を「沼沢派と合流した貪慾なテロリスト」というだけである。こうした表現で，ただ政治的な説明しかしていない。

沼沢派とは平原派のことだが，テロリストという表現は，必ずしも正しくない。テロリストとは，山岳派に属しながら，派遣委員となり，出先で赤色テロをふるった一群の議員のことをいう。フーシェ，タリアン，カリエ，バラ，フレロン等の名をあげることができる。彼らは，たしかに赤色テロを見舞ったが，その反面，金持の財産を横領したり，収賄を行い，一

31 拙著『フランス革命史入門』300ページ。

挙に財産を増やした。いわば，新興ブルジョアの議員であった。

彼らは，ロベスピエールにより腐敗議員と見なされていて，粛清される可能性が強いと感じたので，平原派と同盟して，ロベスピエール打倒の側にまわった。その意味では，この文章は間違いではない。しかし，マチエの文章では，もう一つの重要な部分が抜けている。それは，公安委員会と保安委員会の多数それに加えて財政委員会が，ロベスピエール攻撃の側にまわった事実である。名前をあげるならば，公安委員のカルノー，ランデ，バレール，プリュールと保安委員のアマール，ヴァディエ，財政委員のカンボンなどである。この点の分析にも不十分なところがある。

これを取りあげるかどうかは，理論的な解釈に重要なかかわり合いがでてくる。というのは，平原派やテロリストは，テルミドールの反革命が終ってみると，上層ブルジョアジーの代表者として行動しはじめ，恐怖政治を全廃しようとする。ところが，公安委員会の多数，いいかえるならば，山岳派の生き残りは，まだ恐怖政治を続けようとする意志を捨てなかった。そこで一年がかりで粛清されてしまう。

ロベスピエール派と公安委員会，保安委員会の多数派の間にも対立があったが，公安委員会，保安委員会の多数派と，平原派・テロリストの同盟の間にもまた対立があった。それでは，いったい公安委員会，保安委員会の多数，山岳派主流とはなにかといえば，これは，中流のブルジョアを代表する勢力であった。また，平原派も，ブルジョアジーの党派であったが，ここには，軍隊の御用商人とか大工業家とか，当時の軍事経済で利益を得た大ブルジョアがまとまっていた。ジロンド派と平原派の分裂は，大ブルジョアの内部分裂であった。[32] この点についての解説がなされて，はじめて，フランス革命の諸党派を，階級闘争の中に，社会的経済的因果関係を含め

32 拙著『フランス革命経済史研究』103，105ページ，『フランス革命の経済構造』490-502ページ，『フランス革命史入門』241，304ページ。

て説明できることになる。

XII フランス革命から，どのような結論を引き出すべきか

全体として，マチエのフランス革命史は，豊富な事実を紹介している点にすぐれたものがある。とくに，従来のフランス革命史が，著しく政治史，軍事史にかたよっていたのを改めて，経済的内容を盛りこもうとしたり，とくに，ブルジョア出身の議員や，あるいは議員の背後で動いた個々のブルジョアの動向にまで筆を加えて，内容を豊かにしている点に，すぐれたものがある。

しかし，マチエが理論的分析を試みたところは，その試みが当時としては非常に先進的なものであったとはいえ，首尾一貫性に欠けている。とくに，大ブルジョアが1792年8月10日に倒されて，もう一度また1793年6月2日に倒されたというくだりに至っては，およそ理論とはいいがたいものがある。

その意味で，マチエのこの書物の中に書かれた事実だけに限定しても，その事実関係をもう一度整理しなおすとすれば，マチエの引き出した理論とは別な理論が引き出される可能性がある。そうした意味で，マチエの理論的解釈は，混乱を招くもとになる。

彼の誤解を大筋において整理してみよう。まず，革命前の貴族の力，とくに宮廷貴族の力を過少評価している。それに対応させて，法服貴族やブルジョアジーの力を過大評価している。その帰結として貴族革命論をもってくる。そのため，バスチーユ占領で敗北したものが誰か分らなくなる。そのあいまいさが勝者の定義にも及ぶ。勝者をブルジョアジーだというかと思えば，人民だという。実際は，敗者は宮廷貴族であり，勝者は最上層

のブルジョアであった。

つぎに，領主と地主，領主権と土地所有権（正確には保有権）の区分がつけられていない。また，ブルジョアの領地所有が実際以上に誇張されている。ブルジョア領主は少数であり，ブルジョア地主は多数いた。そして，地主の上に領主がいて，領主権を徴収していた。地主は，領主に貢租を支払いながら，自分の下の小作人に土地を耕させて地代を取っていた。この関係を明確に示してから，地主や領主の言葉を正確に使うべきである。そうしないから，ときどき領主を地主と呼んで，自分で混乱を起している。

領主権の無償廃止は1792年8月10日の事件で実現されたこと，すなわち，ジロンド派政権によって実現されたことを明確にするべきだった。ところが彼は，1年後の日付を並べて書いて，「ジャコバン派が封建貢租を無償で廃止し」という俗説から，脱け出せないままでいる。

8月10日で，大ブルジョアが粉砕され，1年後にまた大ブルジョアが倒されたと書いて，初歩的な自己矛盾を起している。また平原派，山岳派（公安委員会，保安委員会の多数）の階級的背景については，何も考察しようとしていない。フイヤン派，ジロンド派，平原派，山岳派の背後にいるブルジョアの実態を，もっときめ細かく追求するべきであった。

ジロンド派追放を考察するときに，サンキュロットの力を過大評価している。これを大ブルジョア対サンキュロットの図式でとらえ，後者が前者をひっくり返したというのは極論である。まだ，大ブルジョアの力は平原派の背後に残っていた。

職人を，親方層と貧しい職人との区別をつけずに論じたため，職人が，ときにロベスピエールの支持者にされ，ときに，反ロベスピエールの側に分類される。ロベスピエールの強力な支持者には，親方層がなっていたことを明らかにするべきだった。

恐怖政治の混乱がすむと，結局は平原派の線にフランス革命がひきもど

される。このことを明確にしておかないと，フランス革命で結局何が起ったのかについてしめくくりができない。マチエは，ロベスピエールの死に対する哀惜の念を表明するあまり，物事をやや大げさに，あるいは詩的に表現して，かえって誤解を生み出す可能性をつくっている。

「だがテルミドールのクーデタ派は，今や恐怖政治を自分の自由にした。牢獄から仲間を釈放させ，かわりにロベスピエール派で牢獄を一杯にした。彼らが引起した反動の人質となって，彼らは自分たちが望んだよりもずっと先の方へ，これからひっぱられてゆくだろう。多くの人々は，テルミドールの第九日事件に参加したことを，晩年になって後悔するのである。彼らはロベスピエールを殺したために，今後百年間にわたって民主共和国を殺したのである[33]」。

多くの人が，ロベスピエールを殺したことを後悔したという。これは主として山岳派主流についてあてはまる。彼らは，ロベスピエールの支えを失うと，一年後に粛清されてしまうからだ。しかし平原派と，テロリストと呼ばれる新興成金の議員は，決して後悔はしない。彼らは総裁政府から第一帝制のもとでの支配者として留まったから。彼らにとっては，ロベスピエールのいる民主共和国こそ恐るべきもので，それにくらべると帝制の方が安心できる。ロベスピエールを殺さなければ，彼らの財産と生命が奪われてしまう。そのため，誰が後悔し，誰が後悔しないか，その点についての厳密な区別を立てて，ものを言うべきだ。

平原派は，ロベスピエール派や山岳派主流を粛清し，ジロンド派を呼びもどして，大ブルジョアジーの完全支配を復興させた。そのあと，時代の必要に応じて，共和制，帝制と，さまざまな支配体制を採用した。こう言わなければ，全篇を通した理論的考察にならない。

33 マチエ前掲書，下，329ページ。

XIII 明治維新史への悪影響について

マチエの著書は，戦前日本でも翻訳，出版され，社会経済史的観点からのフランス革命史として，日本史研究家からも大いに尊重された。そのため，マチエの誤った理論が，明治維新解釈に尾を引くようになっている。もちろん，マチエだけの誤りというべきものではなくて，マチエが，当時支配的であった理論を，そのまま採用した場合を含むものだが。

さて，明治維新史との関連について論じるだけでも，独立した一つのテーマとなり，これは後日に予定しているが，ここでは簡単に，問題点を，重点的に指摘するだけにとどめようと思う。

マチエが王権を国王個人に限定し，貴族が国王から離れ気味で，かつ没落しつつあり，ブルジョアジーは貴族をしのぐ経済力を身につけて上昇しつつあるかのような描き方をしたことは，絶対主義の均衡論，すなわち，貴族とブルジョアジーの均衡の上に絶対主義君主が独裁権を振うという理論を正当化するものである。これは，そのまま，天皇制権力が，地主と財閥の均衡の上に絶対主義を構築していたとする，いわゆる32年テーゼの補強の役割を果す。逆に，フランスの王権が宮廷貴族（大領主）の権力であったことを確認するならば，天皇制絶対主義説は根拠を失う。

バスチーユ占領でブルジョアジーが権力を握る。そのことを認めながら，人民の権力だといったり，1792年8月10日まではまだ貴族が権力の座にいたかのように書いたりして，あいまいにしてしまう。しかも，この時点で権力の指導権を握ったブルジョアが，最上層の，特権的で，封建制への寄生性の強いブルジョアであったことを明らかにしていない。そこで，日本の読者は，人民に近いブルジョアが権力を握ったと思い込んだ。こうした意識で，明治維新における三井その他の大商人の役割を見た。そうす

ると，日本のブルジョアは特権的，寄生的で，フランスのブルジョアは人民的だったと思われる。これも誤解の種になった。そうではなくて，フランス革命でも，第一段階は，特権的，寄生的ブルジョアが指導権をにぎったのである。彼らは日本の三井と同じような性格をもっていた。

領主権と土地所有権を混同し，領主権の廃止を封建制の廃止であるかのように言い，領主権の無償廃止の時期を1792年ではなく，1793年にもってきて，93年のジロンド派追放をサンキュロット革命であるかのように言い，しかもフランス革命の前史に労働運動と解釈するレヴィヨン事件をもってくる。これだけの五つの誤解を積み上げたものが，また明治維新史に影響を及ぼす。

領主権と土地所有権を混同した上で，領主権の無償廃止が行われたというと，フランス革命で大土地所有制が一挙に廃止されたと思う。いわゆる土地革命説につながる。ところが，日本には地主制が残ったではないかといわれて，日本の方が不徹底だと思われる。あにはからんや，フランスでも地主制が残ったのである。それ以上に，貴族の大土地所有も残った。

領主権の無償廃止はジロンド派政権の時に実現した。マチエは，これを書きながら，1年後のことも書く。日本の読者は，1年後のことに力点をおき，これをジャコバン独裁，恐怖政治，サンキュロット革命に結びつけた。このようなものがなければ，封建制度の徹底的廃止は実現されないのだと。そこで，明治維新は不徹底であり，つまりはまだ絶対主義の段階にとどまらざるをえなかったと考えた。しかし，その前提になる五つの誤解がくつがえされたならば，明治維新の解釈はどのように変るだろうか。こうした問題を背後に持ちつつ，マチエに対する批判を進めたことを付記しておきたい。